

『サー・ガウェインと緑の騎士』論

—サー・ガウェインの起死回生—

山本俊樹

(1)

イギリスの中世ロマンスの中で『サー・ガウェインと緑の騎士』が最も傑出しているとジョン・バロウは述べている¹⁾。アーサー王の円卓の騎士たちの中でも著名なサー・ガウェインの目ざましい事跡がとり上げられているし、ロマンスの特徴とされる魔術的要素とかかわるサスペンスの手法も巧みに取り入れられている。

サー・ガウェインはこの頭韻詩の中で、騎士としてのすばらしさ、即ち、ほとんど完全と言える礼節、武勇、忠誠心等を示すが、最後に近い部分で城主の妻の何気ない言葉を受けて緑の帯を身につけてしまい、緑の騎士にそれを指摘されて恥辱を蒙る。サー・ガウェインは恥と罪科のしるしとしての帯を身につけて、いわば敗者としてアーサー王の宮廷に戻るが、この冒険物語の主人公の弱点が最後になって暴露される点は中世ロマンスとして意表外の結末であると言える。

もちろんマークマンが述べているように、卓越した騎士として生身の人間の代表者であるサー・ガウェインが、ふしぎな未知の世界から来た人物と思われる緑の騎士にどのように直面したかが語られていて、あくまでサー・ガウェインは騎士道の鑑であり、この物語詩は比類のないロマンスである、とする考え方もあるが²⁾、上記のようにサー・ガウェインの欠陥が露呈されたことがこの詩の中心的要素を形づくるという考え方もできる。この詩の中にふしぎな曖昧さや神秘性があることはよく指摘されてきたことであり、それはまた多義性と言ってもよいものかもしれない。しかもさ

まざまの異なる要素が際立って見事な対照をなしていることも注目に値することである。以下この詩を構成する種々の要素を考慮に入れつつこの詩の本質を考察してみたいと思う。

(2)

ごく簡単に纏めればこの詩は二つの主要な出来事が土台になって構成されている。すなわちいわゆる「首切りゲーム」と「誘惑」である。それぞれの出来事は元来は二つの異なった詩ではなかったかと言われることもあったが、やはり最初から統一された一つの作品と考える方がはるかに自然であろう。この詩を読み始めてすぐ気づくことは、最初の連を別にすればこの詩がクリスマスの祝祭の折のアーサー王の宮廷内の情景の描写から始まっているということである。このことはサー・ガウェインが旅に出てサー・ベルシラックの城に辿りつくのが最初の出来事が起こった後約一年たった十二月二十四日であり、このクリスマスの折のサー・ベルシラックの宮廷の状況を重ね合せて考えると一層深い意味がこのことの中に含まれていると感ぜざるをえない。ついでであるが特にサー・ベルシラックの宮廷内の騎士たち、貴婦人たちが楽しく笑いさざめき、また喜んで食卓につく様子はこの詩人が決して禁欲主義のキリスト教詩人でなかったことをよく表わしている。

正月一日アーサー王の宮廷で正餐の直前に片方の手には平和の象徴であるひいらぎの枝、他方の手には北欧製の斧を持ち、緑の馬にまたがった全身緑色の巨大な一人の騎士が入場する。騎士は並みいる宮廷の騎士たちに向って、もし君たちが勇武の士なら、クリスマスのゲームということで、自分が今手に持っている斧で自分の首を斬り落せ、という。さらに騎士につけ加えて言い、自分はその際何の抵抗もしないが、それについては一つ条件があるが、このことをする者は誰でもちょうど一年後に同じ首切りを自分の手から受けねばならない、と述べるのである。騎士は何一つ武具も身につけていなかったのである。

異様ないで立ちの、人々の知らぬ別世界より来たと思われる騎士に人々

は驚き、恐れ、沈黙する。その時若く血気にはやるアーサー王は、誰一人騎士の招きに応ずる様子がないのを見て焦立ち、自分がそれをしようと言うが、王の甥のサー・ガウェインが自身その役を買って出て、自分が王に代って首を斬ろうと申し出た。前述のようにこの詩には神秘的な曖昧な要素が多分に存在して、それがこの詩にえも言われぬふしぎな奥深さを与えているが、緑の騎士はその最たるものと言えよう。この詩の背景についてはすでに多くの優れた研究があるが、この緑の騎士についても背後にアイランドのケルト文学を考えることができる。

サー・ガウェインは緑の騎士の持っていた斧を手にとって地面に下り立った騎士の首を斬り、首は転がって人々に足蹴にされるが、騎士はそれを拾い上げ手に抱えて馬に乗り、一年後に緑の礼拝堂での再会を約束して宮廷を去る。題名から察せられる所では、緑の騎士とサー・ガウェインとはほぼ等しい重さを持っていて対照的であり、「首切りゲーム」も最初はそれぞれが交替して互角に平等に行われるように感ずるが、詩の最後から知られるように緑の騎士には魔術の力が働いて、騎士は斬首されても平然としていられる。いわば一種の非現実的存在である。ところがサー・ガウェインは純粹に生身の人間である。ブルワーによれば、この緑の騎士がサー・ガウェインと結ぶ約束は不公平なトリックである。いわばサー・ガウェインはわなにはまったとも言えるので、騎士はサー・ガウェインが勇壮無比な騎士であることを利用してサー・ガウェインを滅ぼそうとしているようにさえみえるのである³⁾。なぜなら信義に厚く、約束を重んじ、また怯懦であることを好まないサー・ガウェインは当然一年後には万難を排して緑の騎士に会おうと努めるにちがいないからである。のちにサー・ガウェインが緑の礼拝堂で緑の騎士に会ってふと洩らす次の言葉は印象ぶかい。

Quop Gawayn, 'I schunt onez,
And so wyl I no more;
Bot þaz my hede falle on þe stonz,
I con not hit restore. (11. 2280—83) ⁴⁾

(ガウェインは言った。私は一度怯んだがもう二度と怯まない。しかし私の首が石の上に落ちると、もう元通りにはできないのだ。)

サー・ガウェインは緑の騎士と自分の根本的な違いを思って嘆いたのである。それはたしかに悲痛な嘆きである。この詩においては現実の世界と別世界との対照が著しいが、それは又生と死との対照とも結びつく。サー・ガウェインは決意してアーサー王の宮廷を出て、いわば二度と帰ることのない死出の旅に上ったと言っても決して過言ではないであろう。そのことはサー・ガウェインの出立の際に嘆きつつ別れを惜しんでサー・ガウェインを見送った人々の様子からも十分納得できることであると言えよう⁵⁾。

(3)

数々の中世ロマンスにおいてはその季節としては春五月が用いられることが多いのに対し、この詩の季節は主として冬であり、しかもその中心の季節はクリスマスから新年にかけてであると言うことができる。すなわち既にわれわれが見てきたように、緑の騎士がアーサー王の宮廷にやってくるのは一月一日であるし、サー・ガウェインが二ヶ月近い旅を経てもう一つの宮廷に辿りついたのはその年の十二月二十四日、クリスマス・イヴのことであり、そこでクリスマスの祝祭の時を過し、新年の最初の日の早朝にそこを出て緑の騎士のいるはずの緑の礼拝堂へと赴いたのであった。

この詩の中で世俗の面は決して排除されていないが、広い意味でこの詩をキリスト教詩と呼ぶことができよう。主人公サー・ガウェインはいわば騎士道の鑑として登場するが、同時に敬虔なキリスト教徒でもある。ハワードも言うように、騎士道そのものはたしかに世俗の概念であるが、一方キリスト教の理想が深くその土台に据えられていると言うこともできるのである⁶⁾。

たしかにサー・ガウェインはこの詩においては一人の完全な騎士として登場するし、その完全さはサー・ガウェインの持つ楯に象徴されている。その楯は紅色に輝いていたが、その上に純金色の星形紋章が描かれてい

た⁷⁾。この星形紋章は昔ソロモン王が誠実(trawpe)の印として定めた紋章であり、各線には終りがなく、円形の真珠とは形は異なるが、どちらも昔から完全性の象徴とされてきた。またその星形紋章は純金色であり(620行)、詩においてサー・ガウェインその人も純金にたとえられ、比較されている(633行)⁸⁾。

一方楯の内側には聖母マリアの肖像が美しく描かれていて、それはサー・ガウェインの信仰を物語っていた。

この星形紋章はたしかに一方で騎士サー・ガウェインの完全性をさし示しているが、しかしマリア像と関連させてサー・ガウェインの信仰を考えるならば、その完全さはサー・ガウェインが心にさだめて目標として追及していたもの、あるいはサー・ガウェインが最後に得たいと祈り願っていたものと取ることができる。言葉をかえて述べれば、この楯の表面の星形紋章は神自身の完全性の象徴とすることができるであろう。そしてさらに考えを進めれば、神の完全な鏡の前に立つときに、人の中の最高の騎士と言われる者がどのような姿としてあらわされるかという点をこの詩は追求していると言えるであろう。

実はこの詩の中でサー・ガウェインは人としての弱さを曝け出してゆくのであり、最初われわれにとって遠い高嶺の花と思われた騎士にわれわれ庶民と変わらない点があると知ってわれわれは親近感を持つ。前述のようにロマンスがふつう英雄の卓越した事績を取り扱っていることを考えると、このサー・ガウェインの弱さと醜悪さが露呈されるという点ではこの詩はロマンス的でないとも言えるであろう。しかもなおサー・ガウェインの人柄の美しさが最後に読者の心に残ることも事実である。

(4)

この詩は四部にわけられている。第一部を再び簡単にまとめれば、クリスマスに続く祝祭の日々の出来事であるが、アーサー王の宮廷にふしぎな緑の騎士が登場し、人の度胆を抜く提案をする。サー・ガウェインがその首を斬り落すが緑の騎士は首を拾い、馬に乗り、サー・ガウェインに一年

後の約束履行の義務を思い起こさせて宮廷を去ってゆく。緑の騎士がいなくなつてアーサー王は妃グイネヴィアに優しく、「クリスマスにこんな出来事はふさわしいのだよ。」(Wel bycommes such craft vpon Cristmasse. —1. 471) と言うが、第一部ではとんでもないことが起つたという悲劇的様相があらわれている。それ故クリスマス後のアーサー王の宮廷の喜び、楽しさには少し物足りなさが感じられる。とくに詩全体を読んでもその印象が強い。

第二部の冒頭では季節が次々と変り一年が経つたことが述べられるが、この部分は自然と人の移ろいやすさを思い起させる美しい部分である。そしてサー・ガウェインは旅にのぼるが、ここでは宮廷と旅、キリスト教文明とそれ以前の原初の力の対照、違いが顕著に感じられる。サー・ガウェインの孤独な厳しい旅の様子は簡潔に叙述されている。サー・ガウェインは寂しさの中で神に祈りつつ旅を続けてゆく。

Hade he no fere bot his fole bi frythez and dounez,

Ne no gome bot God bi gate wyth to karp. (11. 695—696)

(森や岡を通りつつ彼には馬以外に仲間はなく、道すがら神以外に話しかける相手もなかった。)

この詩には三つの宮廷の状況が出るが、第一、第三はともにアーサー王の宮廷であり、中間の第二の宮廷は、サー・ベルシラックのそれである。第一のアーサー王の宮廷においては後にある深刻な雰囲気は漂うことになるが、しかしそれでも第一、第二の宮廷の情景はクリスマスの恵みと楽しさに包まれていて、笑いや喜ばしい会話や、幸福感溢れる食事のさま等が印象深い。この詩の中で三という数が深い意味を持つことが時折指摘されるが、サー・ガウェインの旅も三度である。この旅はいずれもどちらかと言えば簡潔に記されているが、その中で最も長く叙述されているのは第一の旅である。この詩にはいわば遊びの中に深刻な物語が入れ子になっている消息があるが、第一の旅の厳しさだけ考えてもこれは想像を絶するもの

がある。一部を引用してみたい。

Sumwhyle wyth wormez he werrez, and with wolues als,
Sumwhyle wyth wodwos, þat woned in þe knarrez,
Boþe wyth bullez and berez, and borez oþerquyle,
And etayneþ, þat hym aneledede of þe heþe felle;
Nade he ben duþty and dryþe, and Dryþtyn had serued,
Douteles he hade ben ded and dreped ful ofte.
For werre wrathed hym not so much þat wynter nas wors,
When þe colde cler water fro þe cloudez schadde,
And fres er hit falle myþt to þe fale erþe. (11. 720—728)

(時には竜、また狼、また時には岩の中に住む半人半獣と戦い、さらに他の場合には野牛、熊、猪、また切り立った岩の上から彼を追いかける食人鬼と戦った。もし彼が勇敢で忍耐力がなく、また神に仕える人でなかったならばきっと何度も死んだり、殺されたりする機会があったのだ。というのは彼は戦いで苦しんだが、透きとおった冷雨が雲から降り注ぎ、生氣のない大地に達しないうちに凍りつくその冬の厳しさは一層ひどかったからだ。)

人跡絶えた道を進み行きつつすでに記したようにサー・ガウェインは祈禱を怠ることなく、休息がとれる人の住む所を、又礼拝が守れる場所を求め続けたのである。彷徨の末にサー・ガウェインは十二月二十四日を迎えた。この時サー・ガウェインは一年中で最も重要であると言えるクリスマスの礼拝が守れる場所が与えられますようにと切に求め、三度十字を切って祈り、ついにその祈りが聞かれてふしぎな仕方でサー・ベルシラックの城を発見することができたのである。

第三部では主としてサー・ガウェインが迎え入れられた城の中の情景が語られている。ちょうどクリスマス・イヴから正月一日までということもあるかもしれないが、ここで人々は第一部のアーサー王の宮廷以上に一層

敬虔であり、全体に楽しさと喜びが満ちている。ここでサー・ガウェインは思いにまさって、恭々しく又心から歓迎された。二十四日の夕食は決して粗末なものとは言えなかったがクリスマス当日の祝祭の食事の前ということで、人々はこれを「ペナンス」(penance—1. 897)と呼んでクリスマスを迎えるにふさわしい心の準備をしようとしたのであった。

チャーサーが知っていた宮廷よりガウェイン詩人が知っていた宮廷の方が一層つつましかつたと考えられるが、いずれにせよこの宮廷が洗練されたキリスト教文明の表われの一つであることは言うまでもない。この詩の中に二種の異なった物語、いわゆる首切りゲームと誘惑のそれが入っていることはすでに述べたが、しかしこの詩には見事な統一がある。しかもその中心の舞台はこのサー・ベルシラックの宮廷である。この物語詩を終りまで読んで初めて明瞭にわかることはサー・ベルシラックが緑の騎士であり、宮廷でサー・ガウェインを三日にわたり執拗に誘惑し続ける城主の妻は夫から委細を知らされ、サー・ガウェインを誘惑すべく夫から求められていたのである。この名も知らされていない城主の妻の傍らにひっそりと佇むようにしている女性がモーガン・ラ・フェイである。このことはこの宮廷にいる時のサー・ガウェインには知らされていないが、この女性はアーサー王とは同母異父の関係にあり、サー・ガウェインはこの女性の甥にあたる。モーガン・ラ・フェイは魔術師マーリンとの交りをとおして魔術を会得し、サー・ベルシラックを緑の騎士に変えてアーサー王の宮廷に送りこむことができたのであった。

この詩の中に荒々しい自然やキリスト教以前の原初の世界とキリスト教文明の象徴と言える宮廷との間の著しい対照を見ることができるとはすでに述べたが、このサー・ベルシラックの宮廷にサー・ガウェインが滞在している折にその城主が三日間連続して狩猟に出かけたことは特筆すべきことである。この詩人の宮廷や城の建築の描写、またサー・ガウェインが身体につける衣類、武具等の描写は見事であるが、この狩猟の描写も卓越していて実際の熟練した経験者でなければ到底叙述できない筆運びがみられる。第一日目は鹿、二日目は猪、三日目は狐が獲物になるが、この狩猟

がその同じ三日の間に宮廷で起った城主の妻の誘惑の出来事と相関々係を持ち、見事な対応をなしていることも注目に値いする。

この狩猟の様子、またそのしとめた獲物の処理の方法、猟犬のあしらい方などは興味深く読者を惹きつけるが、これは何ととっても荒々しい自然の中の出来事であり、しかも城主、家臣の狩人たち、動物たちの間の死闘の凄まじさが心に迫ってくる。

モーガン・ラ・フェイがこの物語詩の中の原動力になっていることは確かであるが、しかし直接姿があらわれる回教はそれ程多くない。詩人はむしろ隠れた所にこの女性を置きたかったと想像できる。しかしモーガン・ラ・フェイはクリスマスの礼拝にも城主の妻とともに出席するし、ひそやかではあるがそれなりの気品を保ち、サー・ガウェインが城から旅立つ前夜には城主の妻とともにサー・ガウェインをキリストに委ねて悲しく溜息をつきつつ見送るのである¹⁰。その態度にはやはりサー・ガウェインの上を気遣う思いが溢れていると考えることができる。城主も敬虔なキリスト教徒であって、心から明るくサー・ガウェインに接して客人を喜ばせ、サー・ガウェインはゆっくりと寛ろいでクリスマスの祝祭の日々を過すことができた。しかし城主はふしぎな提案をサー・ガウェインにしたのであり、それは互いが一日を過す間に得た獲物の交換であった。

城主はすでに述べたように三日続けて狩猟に出るし、城に帰るとサー・ガウェインにその獲物を渡した。一方サー・ガウェインは宮廷内で得たものを城主に渡すことになるが、結局それは城主の妻が与えた接吻ということになる。この獲物の交換の物語はこの詩の中で第三の物語あるいはテーマをなすと言われるが、この詩の構成にとって極めて重要であり、「誘惑」と結びつき、また「首切りゲーム」とも結びついている。最後の緑の騎士のサー・ガウェインに対する斬首の行為は結局サー・ガウェインが宮廷内でいかに自らを処したかをそのまま映し出す鏡と言えるものであるから、それだけに宮廷内でのサー・ガウェインが得たものと、それを得た経緯が重要になってくる。以下その提供者が登場する誘惑の場面について考察を進めたい。

(5)

朝城主の妻がサー・ガウエインの寝室を訪問して両者が睦まじく語りあう情景は楽しい。それは両者ともに豊かなユーモアの持ち主であるからである。しかし最初読者にはわからないが、城主からサー・ガウエインを誘惑すべく言いつけられている城主の妻は言葉においても行為においても次第に思い切った大胆な様子を見せ、サー・ガウエインの愛をかちえようとする。もしサー・ガウエインが口ほどにもない不実な騎士であったならば、早速サー・ガウエインは城主の妻との間の不倫の恋に落ち、肉の欲を満たすことになったであろうが、その結果はブルワーが示唆しているように緑の礼拝堂で緑の騎士から首を打ち落とされてあえない最後をとげることになったであろう¹¹⁾。しかしサー・ガウエインにはアーサー王の宮廷の名誉がかかっている緑の騎士との約束があり、自らの死を目前にしていたので城主の妻の誘いにのることはできなかつたし、またこのクリスマスの折に行きずりの旅人にすぎなかつた自分を心からもてなす城主の期待を裏切ることでもできなかつたのである。むしろ更に重要なことは聖母マリヤがその騎士であるサー・ガウエインを守つたと詩人が記していることである。またサー・ガウエイン自身も懸命に神に加護を祈つたのである。サー・ガウエインは自分を過信することのない騎士であつたのである。詩人は次のように述べている。

þay lanced wordes gode,
 Much wele þen watz þerinne;
 Gret perile bitwene hem stod,
 Nif Maré of hir knyzt mynne.

For þat prynces of pris depressed hym so þikke,
 Nurned hym so neþe þe þred, þat nede hym bihoued
 Oþer lach þer hir luf, oþer lodly refuse.

He cared for his cortaysye, lest crapayn he were,
 And more for his meschef ʒif he schulde make synne,
 And be traytor to þat tolke þat þat telde aʒt.
 ‘God schylde,’ quop þe schalk, ‘þat schal not befalle!’
 With luf-lazyng a lyt he layd hym bysyde
 Alle þe spechez of specialté þat sprange of her mouthe.

(11. 1766—1778)

(二人は楽しい言葉を語りあい、大いに喜んだ。もしマリヤが彼女の騎士に心をとめなかったとしたら危険なことが起こっただろう。というのはその高貴な奥方が激しく彼に迫って限度を越えそうになるので彼女の愛を受け入れるか、嫌ってそれを拒むかせねばならなくなったからだ。彼は失礼にならぬよう礼節を守りたかったし、さらに一層罪を犯して城主を裏切って悪者になることを心配した。「このことが起こりませんよう、神よ守りたまえ。」と彼は祈った。彼女の口からでる愛の言葉をにこやかに、しかしすべて受け流したのだった。)

城主の妻にはしたない嬌態があったとはいえ、結果的には最後の一线を越えることはなかったし、一方サー・ガウエインは見事に身を持ち、礼節の点で、純潔の点で、また宮廷愛や忠実さに関しても、城主の妻の誘惑に敗れることはなかったのである。いわばサー・ガウエインのお蔭で城主の妻もまた辛うじて礼節を守りえたといっても過言ではないかもしれない。二人が二人だけで出会った三日目の最後の朝も、両者とも罪を犯すことなく別れようとするが、その前に城主の妻はサー・ガウエインから記念の品を求め、それに対してサー・ガウエインはさし上げる程のものが無いと言って断った。それでは、と今度は城主の妻が自分の指輪を受けるようにとさし出すが、それが断られると次に、「ほんの小さいつまらないもの」(so hit is littel, and lasse hit is worpy.—1. 1848) と述べながら金の縁どりのある緑の帯をさし出した。サー・ガウエインはもちろんこれをも断ろうとするが、城主の妻は続けて、「この帯にはふしぎな力があり、これを身につけて

いれば人から殺されることはない。」と言った¹²⁾。これを聞いてさすがのサー・ガウェインの心も揺らいたのである。明日は殺される身とわかっている自分である。この帯を貰い、身につけて緑の礼拝堂に赴くことはゆるされることではないかとサー・ガウェインは思案した。ふと弱気が出たのである。この後城主の妻は、この帯の授受のことは二人だけの秘密にしておきたいから誰にも口外しないように、夫にも黙っておいてほしいと懇願した¹³⁾。サー・ガウェインは同意し、ストーンによると誓約さえしたのである¹⁴⁾。

サー・ガウェインは城主と話しあい、二人の間で獲物を交換しあうと約束していたが、ここで城主の妻との約束が新たに生じたのである。宮廷愛の伝統に従ってサー・ガウェインは以前にも城主の妻のしもべになると再々言及していたし、この城主の妻との約束は城主との前の約束に優先してサー・ガウェインにとり重要性を持つことになったと考えられる。鈴木栄一氏はこの詩の主題を「忠実性」(loyalty)への試練であるとして次のように述べる。

Gawain 詩人は、崇高なるもの、厳粛なるものの追求に心を砕いていたように思われる。Gawain の loyalty の破棄は、単に騎士たる者にとっての重罪であるのみならず、ひいては彼の人間としての全存在にかかわるものなのであり、このような loyalty の厳しい追求、人間の限界を越えるような追求の過程において、Gawain は《探求者》であり、《旅人》であると解釈される。彼の辛く、厳しい《探求の旅》、《精神の旅》は、緑の礼拝堂を探し求める「苦しい旅」の結果として、Gawain に、一点の非もない完全な騎士ではなかった自己、失敗の可能性を秘めた自己を発見させることになる¹⁵⁾。

菊池清明氏はこれに対して、loyalty についての試練が主題であるとすれば、この作品の基調はコメディであるとするベネットたちの主張に反することになり、ロマンス本来の楽しい雰囲気は軽視されることになる、と反

論している¹⁶⁾。

loyalty は原語 *trawpe* の訳語と言えるが、その基礎に「契約」(agreement また covenant) を考えることが自然であると言える。特にこの詩の背景にある聖書の伝統を思う時に、「契約」は極めて重要な概念であることが思い浮かぶのであり、この詩人が聖書に深く沈潜した詩人であることも思い合されるのである。たしかに鈴木栄一氏が述べるように、サー・ガウエインの旅は内的自己探求の旅であり、その中に厳しさが内包されていることは否むことができないが、一方でクリスマスの喜ばしさがこの詩全体を暖かく包んでいることも同様に認めざるをえないのである。そのためには緑の帯の性質をさらに深く考察する必要が生ずることは当然である。

(6)

この詩の第三部、第四部にいわゆるサー・ガウエインに対する「罪障消滅宣言」(absolution)が一回ずつ出てくる。第三部においてはサー・ガウエインが城主の妻より緑の帯をもらう直後に与えられる¹⁷⁾。ここで司祭は、「罪障消滅を明確に告げ、最後の審判の日が翌日きても大丈夫なように、彼をきよいものとしたのである。」(he asoyled hym surely and sette hym so clene/As domezday schulde haf ben diȝt on þe morn.—11. 1833—34) この箇所についてゴランツをはじめとしてハワードヤストーンは、サー・ガウエインの罪の告白は緑の帯についての言及がなかったと思われるので不完全であるとするが¹⁸⁾、N. ディヴィスの主張の方が一層説得力があると思われる¹⁹⁾。

いわばサー・ガウエインは大晦日の日にはその翌日に訪れるはずの自らの死の用意を完了して心おきなく過したのである。寝所に入ってからはいく眠れなかったかもしれないと詩人は記すが、サー・ガウエインも人の子である。死を目前にしていろいろな思いが湧いてきて眠れなかったとしてもそれは人の自然であろう。ただ大晦日の夜に起こった重要な出来事についても一度われわれ自身の注意を喚起しておくことは必要である。すなわちそれはサー・ガウエインと城主との間の獲物の交換である。城主が狐

をサー・ガウェインに贈るまえに、サー・ガウェインは進み出て城主を三度接吻した。つまり城主の妻がその朝与えた数の接吻がその夫に戻されたのである。すでに罪障消滅宣言も受けているし、城主の妻との約束もあるし、サー・ガウェインは緑の帯を城主に与えなかったが、これを契約違反とは考えなかったことであろう。もちろん城主は知らないことになっているからサー・ガウェインに咎め立てをするわけもない。その後サー・ガウェインは城主に対して自分が受けた親切に心からの感謝の言葉を述べ、城主もサー・ガウェインの依頼があったからではあるが、次の朝同行すべき道案内を喜んできめてやり、二人は続いてそれぞれの自分の寝室に戻ったのである。女性たちが悲しみながらもキリストにサー・ガウェインを委ねて別れを告げたことはすでに見たとおりである。

確かに緑の帯はサー・ガウェインに淡い生への期待を抱かせた。城主の妻よりそれを受けとり、それを貴重であると考えたこともたしかであろう。しかしサー・ガウェインがそれに最終的、また究極的信頼を置くことができなかつたことは言うまでもなく明らかである。サー・ガウェインは神に信頼を置いてここまで旅をし、またすでに多くの試練や誘惑にも打ち勝つことができた。緑の帯のことが時に脳裡に去来することがあっても、サー・ガウェインの残された仕事はあくまで神に信頼を置きつつ静かに死を迎えること―抵抗することなく緑の騎士によって斬首されること―であった。サー・ベルシラックの宮廷をあとにして緑の礼拝堂に進みゆくサー・ガウェインにやはりその神への信頼の態度を見ることができる。

(7)

第四部に入る正月一日のサー・ガウェインの宮廷からの出発の様子や、続いて厳しい戸外の自然の状況が叙述される。詩人はサー・ガウェインが見事にまた入念に旅装を整えたことを述べるが、もちろん城主の妻が贈った緑の帯をサー・ガウェインが忘れずに身につけたことを記す。騎士は心から宮廷の人々の上にキリストの恵みを祈りつつ出立した。

第四部の一つのエピソードはサー・ガウェインに緑の礼拝堂への道を示

す案内人が途中で緑の騎士の恐ろしさを告げ、緑の礼拝堂を通り過ぎようとする者は例外なく殺される、自分は決して他言はしないからぜひ逃亡するようにとすすめる話である。案内人は緑の騎士その人の変形した姿であるという考え方もあるが、そう考えられる程に案内人は緑の騎士についてよく知っていると思われるのである。もちろんサー・ガウェインはその申し出を断り、次のように言う。

Bot I wyl to þe chapel, for chaunce þat may falle,
And talk wyth þat ilk tulk þe tale þat me lyste,
Worþe hit wele oþer wo, as þe wyrde lykez
hit hafe.

þaʒe he be a sturn knape
To stiʒtel, and stad with staue,
Ful wel con Dryʒtyn schape
His seruauntez for to saue.’ (11. 2132—39)

(だが私は何が起ろうとも礼拝堂へ行こう。そして幸いであれ災いであれ運にまかせて心ゆくまでその男と話そう。その男が扱にくいきびしい奴で棍棒を持って立っていても、神は自らのしもべを完全に救う道を講ずることができる。)

サー・ガウェインは神に信頼して案内人のすすめを受け入れようとはしなかったのである。案内人はすぐさまサー・ガウェインを置き去りにして帰ってゆくが、この騎士はなお神に信頼して続けて次のように言う。

‘Bi Goddez self,’ quop Gawayn,
‘I wyl nauþer grete ne grone;
To Goddez wylle I am ful bayn,
And to hym I haf me tone.’ (11. 2156—59)

(ガウェインは言った。「神かけて泣きも呷きもすまい。神の意思に私は

心をきめて従っている。そして神に私自身を委ねている。）」

やがてサー・ガウエインは墓穴とも見まちがうようなおぞましい緑の礼拝堂に出くわし、サー・ガウエインが声をかけるとそれに応ずる声があった。サー・ガウエインは緑の騎士に出会ったのである。緑の騎士はサー・ガウエインが約束を守ってここにやってきたことを賞め、約束どおり首を打つから神妙にしろ、と言う。サー・ガウエインはそれに答えて、神に誓って恐れず抵抗せずに静かに首を打たれよう、という。

実際には緑の騎士が最初に斧をふり下そうとした時にはサー・ガウエインは少し怯んだが、その後は泰然自若として少しも悪びれる所はなかった。神に信頼してそのみ手の中に自身を投げ出しているサー・ガウエインの姿がよく表われている。「死は人の定め」と言われるが、このことをこの詩はよく示しており、しかも一人のキリスト信徒が神に信頼して死を迎えようとする様子をよく描写している。サー・ガウエインは生も死も神に委ねて安らかで動かない。この時サー・ガウエインの心の中には緑の帯についての思いは微塵もなかったと想像できる。

しかしこの時いわば「ペリペテイア」(大転回)が起こったのである。緑の騎士がふり下した最後の斧は、サー・ガウエインを斃さず首の皮膚のみを切り、血が迸り出たがそれだけだったのである。サー・ガウエインは自分が生きていることをこれほど嬉しく思ったことは今までになかったに違いない。緑の騎士との約束は、斧を打ち落すのはただ一回のみということだった。武装していたサー・ガウエインは直ちに戦いの姿勢を取ったのである。

ところがここで緑の騎士は今までと全く異なる自分の正体を表わしたのである。緑の騎士はその日の朝までサー・ガウエインが宿っていた宮廷の城主、サー・ベルシラックだったのである。そして緑の騎士は、サー・ガウエインが緑の帯を受け取ったことが、自分が妻を用いて仕掛けた誘惑に敗北したことであり、それがとりもなおさず獲物の交換の不履行ともなると指摘したのである。しかし、ガウエインが「帯の見事な出来具合や妻

の誘惑のためでなく、生命を惜しんだそれだけの罪だったから」(pat watz for no wylyde werke, ne wowyng nauþer, Bot for þe lufed your lyf,—11. 2367—68)、首の皮膚を軽く切っただけにしたのだ、と言った。サー・ガウエインは腰が抜けるほど驚いた。たちまちサー・ガウエインは自らの臆病さと貧欲さ(生命惜しき)を呪い、また聖書中の著名な人々が女性の誘惑により罪を犯したことを想起した。サー・ガウエインは自分の弱さと醜さが露呈されるたねとなった緑の帯を城主に投げ返すが、しかし自分がしみじみ不実であり、生命をかけて重んじてきたと思っていた騎士の道を紛うかたなく踏み外してしまったことを知った。いわばサー・ガウエインはここで明確な形で罪の全告白をさせられたと言えるのである。その後直ちに緑の騎士の罪障消滅宣言の場面がくる。緑の騎士は、あなたはもうその告白できよくなっている、と述べ、緑の騎士との冒険の記念として緑の帯を受け取るように、と言って緑の帯をサー・ガウエインに返し、さらに、もう一度宮廷にもどって楽しみ、自分が取りもつから妻とも和解するように、と言ったのである。サー・ガウエインがそれに応じなかったのは当然であった。

(8)

かつてこの騎士にとって楯は完全性の象徴だったが、今サー・ガウエインは緑の帯を自分の恥辱のしるしとして生涯身につけることを決心してそれを再び受けとり、緑の騎士に別れを告げて、恐らくは二度と戻ることはないと思っていたアーサー王の宮廷へと道を進めたのである。いわばサー・ガウエインは赦された罪人として、自分の旅の出発点またふるさとへと戻って行ったのであった。

それでは一体緑の帯は何を表わし、意味しているものであろうか。明らかに言えると思われることは、万一サー・ガウエインがあ誘惑の場で心に動揺を覚えることなく緑の帯を最後まで拒みとおしたとしたら、サー・ガウエインは緑の礼拝堂で何の傷も受けなかったかもしれないが、われわれ一般人はいわゆるこの信仰の篤い高貴な騎士にほとんど興味を抱かず、

むしろ愛想を尽かしてしまうことになったかもしれない。この詩はサー・ガウェインの再生、新生、また自己発見の旅物語とも言える。サー・ガウェインは最初より信仰の騎士であり、アーサー王の宮廷においても謙遜であり、サー・ベルシラックの宮廷でも分を辨えた信仰者であった。しかしサー・ガウェインのようにあまりに誉れ高い騎士は知らず知らずのうちに人間離れしてしまい、親しみにくい者になりやすい。自ら切瑳琢磨して自分なりの理想像を獲得すべく努めるが、その過程で自己を喪失してしまうことは十分起こりうることである。このように自己を喪失しかけていたサー・ガウェインが本来の自己に立ち戻るためには、一度自分が外からの力によって突き崩される必要があった。緑の帯は実にその働きをしたのである。死を恐れず生命を捨てることを物ともせずアーサー王の宮廷の名誉のために、神のために、と勇んだサー・ガウェインが大晦日の朝に自分の中に正直な、生命を惜しむ心が潜んでいることに気づかされたのである。この詩は素朴な、生命を愛惜する心の大切さを教えてくれている。

生命を惜しんだサー・ガウェインは緑の帯を貰い受け、それを身につけて緑の礼拝堂に赴いた。そして緑の騎士をとおしてその過誤罪責が指摘され、また自らの徹底的弱さを知った。どの人間も死の定めを持ち、弱さを持っているのであるから実はこれが人の自然である。そしてこの不完全な、弱さを持つサー・ガウェインこそが、真のキリスト教騎士サー・ガウェインなのである。このことで解ることは、それまでのサー・ガウェインの中に虚偽があり、誇り、高慢さが潜んでいたということである。やっとサー・ガウェインはこの経験をとおしてそれまで失われていたありのままの素朴な自分を取り戻すことができたのであり、緑の騎士よりも赦しを得て生命拾いをし、今度はいわば神の賜物としての新しい生命を得たと言えるのである。そしてこれこそが本物の生命であった。このようにして解ることは緑の帯がサー・ガウェインを真の生命へと呼びもどすきっかけだったということである。

アーサー王の宮廷にもどったサー・ガウェインは率直に自分の恥の話をしたが、アーサー王はサー・ガウェインを慰め、宮廷のすべての人たちも


笑いながら喜んでサー・ガウェインを受け容れ、皆がサー・ガウェインにならって緑の帯をつけるようになったと最後に詩人は記している²²⁾。

ふしぎなことはサー・ベルシラックの宮廷に、やはりある真実な雰囲気が見られることである。たしかに城主の妻のサー・ガウェインに対する愛の誘惑は度が過ぎていると言えよう。しかし三日目の朝に緑の帯をさし出した城主の妻の心の中に、サー・ガウェインの身を真に気遣う真実の思いやりが潜んでいなかったとは言えないのである。緑の帯を受けなければ、サー・ガウェインが万一生きながらえたとしてもその人は自分の弱さに気づかず、生命に目覚めることのない、死んだも同然の人としてアーサー王の宮廷に帰ったかもしれなかったのである。単なる男女の愛以上に深い愛を城主の妻がサー・ガウェインに対して抱いていなかったとは言えないと思われる。そのような雰囲気がサー・ベルシラックの宮廷の中に見られるのである。時はクリスマスである。あとでサー・ガウェインが自ら承認したとおり、その宮廷においてこの騎士は実は多くの弱さを持っていたのである。しかしサー・ガウェインはふしぎな暖かさの中で、その弱さが赦されている者としてサー・ベルシラックの宮廷で日々を過すのである。クリスマスの季節に神の恵みが満ち溢れて、いわばこの宮廷の中に赦しの愛が存在することが感じられるのである。

この詩はやはりクリスマスの祝祭の心暖まる楽しさを語る詩であり、またそれに伴い神の恵みを頌めたたえる詩であると言えよう。最後にアーサー王の宮廷の人々が暖かく、喜んで、包むようにサー・ガウェインを迎えたのも、その騎士の恥の痛みが理解できないからではなく、それを知った上でサー・ガウェインと同じ所に立とうとする心を表わしていると考えるのが、最も自然で無理のない考え方ではなからうか。放蕩息子を暖かく迎え入れた父の神の愛も思い合されるのである。クリスマスの赦しと愛と恵みに包まれた詩としてこれを読む時に、すべてがよかったと思われてくるのである。そのクリスマスの恵みの中に、緑の騎士、すなわちサー・ベルシラックも、その妻も、モーガン・ラ・フェイも受け入れられていることに気づかせられるのである。

たしかに緑の騎士は曖昧で不可解な要素を多分に内に秘めている人物である。旧約聖書の厳しい律法の性質、死の持つおぞましい力、すべてがあらわになる最後の審判の象徴のような面があるかと思うと、他方では赦しと和解の使者であり、サー・ベルシラックと同一人物とすると、生活力溢れる一種の「生産の神」(vegetation god) のようにもみえる。しかし旧約聖書的な厳しい義をも含めて広い意味のキリスト教的愛が全体を包みこんでいると思われる。そしてその土台には生命を重んじ、大切にしている心がある。十四世紀後半に書かれたこの詩の中のサー・ガウェインが何と力強く生命の大切さを現代に語りかけているかを思い、驚嘆の念を禁じえない。

注

- 1) J. A. Burrow, "Sir Gawain and the Green Knight," *The New Pelican Guide to English Literature, Medieval Literature, Part One*, ed. by Boris Ford (1982. Harmondsworth; Penguin Books Ltd, 1986), p. 208.
- 2) A. M. Markman, "The Meaning of *Sir Gawain and the Green Knight*," *Sir Gawain and Pearl, Critical Essays*, ed. by R. J. Blanch (1966. Bloomington: Indiana University Press, 1971), pp. 161, 162.
- 3) Derek Brewer, "Courtesy and the *Gawain-Poet*," *Patterns of Love and Courtesy*, ed. by John Lawlor (London: Edward Arnold, 1966), p. 57.
- 4) J. R. R. Tolkien and E. V. Gordon, 2nd edn, rev. N. Davis (ed.), *Sir Gawain and the Green Knight* (1967. Oxford: Oxford U. P., 1972), p. 63.
以下の原詩の引用はこの書物による。
- 5) *ibid.*, cf. 11. 673—675.
- 6) D. R. Howard, *The Three Temptations* (Princeton; Princeton U. P., 1966), pp. 221—223.
- 7) その紋章は右のようなものである。
- 8) R. G. Arthur, *Medieval Sign Theory and Sir Gawain and the Green Knight* (Toronto: University of Toronto Press, 1987), p. 83.
- 9) A. C. Spearing, *The Gawain-Poet* (Cambridge: Cambridge U. P., 1970), p. 172.
- 10) cf. 1. 1982.

- 11) Brewer, *op. cit.*, pp. 72—73.
- 12) cf. 11. 1851—54.
- 13) cf. 11. 1862—63.
- 14) *Sir Gawain and the Green Knight*, second edition, tr. by Brian Stone (Harmondsworth: Penguin Books, 1974), p. 90.
- 15) 鈴木栄一『サー・ガウェイン頌』（開文社出版、1990）、101ページ。なお112ページ、注58参照のこと。なお拙論執筆は若くして召天された畏友鈴木栄一氏を記念し、その学恩に感謝する意図が含まれている。
- 16) 『英文学研究』（日本英文学会、1992年1月）、Vol. LX VIII、No. 2、391ページ参照。
- 17) cf. 11. 1872—1888.
- 18) Stone, *op. cit.*, p. 181.
- 19) *Sir Gawain and the Green Knight*, 2nd edn, ed. by N. Davis, p. 123. デイヴィスは言う。
 A poet so concerned with Gawain's piety and attention to religious observances could not fail to 'notice' sacrilege. His insistence on the completeness of the confession and absolution—'schrof hym schyrly', 'sette hym so clene'—leaves no room for such an interpretation; nor would a man of Gawain's devotion, if he had been tempted by the fear of death to abuse the sacrament of confession, feel merrier than he ever had in his life. His joy is depicted as consequent on the absolution, which means that the absolution was valid. The poet evidently did not regard the retention of the girdle as one of Gawain's 'mysdidez, þe more and þe mynne', which required to be confessed.
- 20) cf. 11. 2156—59, 2208—11, 2255—58, etc.
- 21) cf. 11. 2250—58.
- 22) cf. 11. 2513—18.